

平成11年度 研究部活動報告

赤荻 颯子 阿部 睦子 池田 正雄
柴田 俊和 西原口伸一 平賀 伸夫
研究部

I 本年度の活動

1 本年度の活動方針と活動概要

本年度の本校研究部の活動方針は、従来通り、

- 「研究面における良き推進力になること」
- 「研究活動の活性化を図るとともに、先生方に密着した研究部を目指すこと」

である。

具体的には、

- 1 「研究部としての日常的業務を行うこと」
- 2 「次期公開研究会実施に向けて、方針、研究主題の設定等を行うこと」
- 3 「竹早地区将来構想（幼小中合同研究）を推し進めること」

の3点である。

2については、前回の公開研究会（平成10年11月実施）の研究主題「豊かに表現する生徒を育てる」を受けて、本研究をさらに掘り下げ、深めるために「豊かに表現する生徒を育てる II」

という研究主題を設定し、平成13年（2001年）11月中旬に公開研究会を実施することに決まった。

2 研究部分掌

- 附属・研究推進委員会等渉外 ……(池田)
- 研究会（校内、公開）推進 ……(柴田)(池田)
～方針、研究主題設定、研究の方向性等～
- 研究紀要 ……(柴田)
～原稿の募集、取りまとめ、編集、発注、
発送等～
- 研究資料、対全国附属関係 ……(西原口)
～研究会案内の受け取り・紹介、他校研究
紀要等の保管・整理、日本教育新聞の受
理・整理・保管等～
- 竹早地区将来構想（幼小中合同研究）…(平賀)
- 帰国子女教育研究 ……(赤荻)

●予算・記録 ……(阿部)

II 次期公開研究会に向けて～一年次

前回の公開研究会は、平成10年（1998年）11月に「豊かに表現する生徒を育てる」を研究主題として実施された。本校では今後3年程度の周期で公開研究会を実施していくべきだとの共通理解のもとに、本年度は、校内の「研究会」を中心に次期公開研究会の実施に向けて、方針、研究主題、研究の方向性等の基盤作りを中心に検討を行ってきた。

1 「研究会」の経過報告

(1) 第1回「研究会」 平成11年5月20日実施

【協議事項】

1. 発表時期をいつにするか。
2. 研究主題を何にするか。

前回公開研究会後のアンケートをもとに、発表時期、研究主題、研究グループ等について協議した。

(2) 第2回「研究会」 平成11年6月25日実施

【協議事項】

1. 発表時期を平成13年(2001年)秋に実施する。
※「秋」とは11月頃を予定しているが、はっきりとした期日は後日決定したい。
2. 研究主題は、「豊かに表現する生徒を育てる」
～新学習指導要領をふまえて～

研究部提案として、上記1、2の議題について協議した。

その後の教官会議で、次期公開研究会の開催時期を平成13年(2001年)11月に行うこと(具体的な日にちは後日決定する)、研究主題を「豊かに表現する生徒を育てるⅡ」と決定した。

(3) 第3回「研究会」平成11年10月25日実施

【協議事項】

1. 前回公開研究会のまとめ(教科・グループ)
2. 次期公開研究会までの進行カレンダー
3. 次期公開研究会に向けての、研究内容・方法の方向性

1については、次期公開研究会の主題が「豊かに表現する生徒を育てるⅡ」に決まり、これまでの研究を継続する形をとる方向になったので、前回の公開研究会で各教科、グループで発表したことをもう一度復習し、良い点を共有化することが今後の研究を進める上で必要と考え、報告会を行った。

2については、研究を進める上での研究スケジュールを検討した。

3については、前回の公開研究会の問題点の検討、継続研究としての研究の方向性等の検討を行った。

(4) 第4回「研究会」平成11年11月30日実施

【分科会】各教科・グループごとの研究テーマ
検討

全体主題を受けて、各教科・グループごとに分科会を開き、研究テーマの検討を行った。

(5) 第5回「協議事項」平成12年2月22日

【協議事項】

1. 前回公開研究会のまとめ(図解をもとに)
2. 各教科・グループの研究テーマ、研究概要の発表
3. 今後の進め方～来年度に向けて

2については、11グループ(9教科、2総合的な学習)ごとに、研究テーマと研究の概要が発表され、

来年度に向けての研究の方向性が絞られてきた。

現段階では、

研究主題：「豊かに表現する生徒を
育てるⅡ」

開催日：平成13年(2001年)11月

※日にちは後日決める。

まで決定している。来年度以降は、竹早中学校の研究の構造化の検討と、各教科・グループの具体的な研究活動が行われることになる。

Ⅲ 竹早地区将来構想(幼小中合同研究)

本年度は小学校の校舎改築に伴い具体的な活動はできなかったが、昨年暮れに小・中一体型の校舎が完成し、言わば、ハード面が整ったことを受け、来年度以降は一時中断していたソフト面の検討、つまり、幼・小・中の一貫教育について、具体的に検討を進めていかなければならない時期にきたと考えられる。(文責：池田)

Ⅳ 研究紀要執筆要領の改訂

従来までの本校研究紀要の執筆要領に若干の不備な点があったため、今年度は全面的に内容の見直しを行い、新たな執筆要領を教官会議において審議し、可決された。改訂された内容を示す。

研究紀要 執筆要領

研究部 平成12年2月16日改訂

1. 原稿の構成

以下の構成を原則とする。

- ① 標題
- ② 氏名及び教科等名
- ③ 要約
- ④ キーワード
- ⑤ 本文
- ⑥ 注
- ⑦ 文献

- ⑧ 資料
- ⑨ 欧文要旨

2. 原稿用紙

原稿は、原則として、付則に指定するいずれかの日本語ワードプロセッサを用いて作成し、A4版、横書き、1ページ23字2段組(段間4字)40行とし、上下左右の余白は2.5cm以上とする。

手書きで原稿用紙を利用する場合には、本校所定のものを用い、黒インキ書きとする。

3. 提出原稿

提出する原稿は、ワードプロセッサによるオリジナル原稿ならびに原稿を打ち込んだ3.5インチフロッピーディスクとする。

手書きの場合は、オリジナル原稿とA4版にコピーしたレイアウト見本及び図表・写真・資料等を添付して提出する。

4. 原稿の書き方

以下の書き方を原則とする。

- (1) 原稿の本文は、ひらがな現代仮名遣いとする。
外国語は原語を活字体で書き、仮名書きする場合にはカタカナとする。
- (2) 句読点は、マル(。)とコンマ(,)を用いる。
いずれも全角とする。行末にきた場合は、行末欄外につけ、次行にしない(ワードプロセッサの場合には、句読点をぶら下がり処理にする)。
- (3) 上記原稿の構成の内容①～④については段組にしない(要約は1行50字で20行程度とする)。
⑤の本文以下については段組とするが、原稿の内容や性格(図表や写真、資料等)によって段組を部分的に解除してもかまわない。
- (4) 標題と氏名及び教科等名とを合わせて、原稿用紙の5行分を充てる。
- (5) 見出しは次のようにする。

① 数字

章	I	II	III	IV
節	1	2	3	4
項	(1)	(2)	(3)	(4)

② 位置

数字は1マス目に書き、文字は1マスあけて3マス目から書く。

③ 行数

章については原稿用紙の2行分、節及び項についてはそれぞれ1行分を充てる。

- (6) 図表原稿は、必ず黒インクで墨入れし、図中の文字や数字は縮小して直接印刷できるようにきれいはっきりと書く。方眼紙を用いるときには、薄藍色のものとし、写真は白黒の鮮明なものとする。

カラー写真をカラーで印刷する必要があるときは、そのことを原稿の欄外に赤インクで明記する。

- (7) 図や表には必ず通し番号とタイトルをつけ、一枚ずつ台紙か原稿用紙に貼り、本文とは別に番号順に一括する。図表の挿入箇所は、原稿の欄外に赤インクでそれぞれの番号によって指示する。

写真の位置・大きさは、原稿用紙にワク囲みして指定する。

- (8) 注は、本文中に右肩付き数字 ①) ②) で示し、本文の後にまとめる。
- (9) 文献は、原則として本文の最後(注の後)に一括し、雑誌の場合には、著者名(3名以上の場合には、ほか、et al. など)、題目、雑誌名、巻号、ページ、西暦年号の順に、単行本の場合には、著者名、[論文題目]、書名 [ページ]、出版社名、西暦年号の順に記載する。

なお、本文中の引用箇所の右肩上に1)、2)、3)のように、該当する文献番号をつける。同一の文献が数回にわたって引用される場合には、(1-p. 80)のようにすることもできる。

その記述のしかたは、次のようにする。

① 単行本の場合

著者名：[論文題目]、書名 [ページ]、版次、発行所：所在地、ページ、発行西暦年号。

② 雑誌論文の場合

著者名：論文題目、雑誌名、巻号、発行所：所在地、ページ、発行西暦年号。

- (10) 文字は全角。括弧も全角とする。数字は算用数字を用い、度量衡の単位はSI単位を用いる。数字

は一桁の場合は全角とし、二桁以上の場合は半角にする。三桁の場合は、全角2文字分のなかに半角で入れる。

- (11) 各論文等の最初に目次はつけない。
- (12) ⑨の欧文要旨については、特に必要がない場合には、添附しなくてもよい。添附する場合、原稿は、欧文(英語、独語、仏語のいずれか)による1000語以内のものとし、A4判のタイプ用紙にパイカ、ダブルスペースでタイプライターか欧文ワードプロセッサを用いて作成する。用紙の上下左右は3センチの余白を置き、ほぼ27行にわたって書く。欧文の標題の下に著者名(ローマ字)と教科等名(欧文)を書く。

付 則

1. ワードプロセッサの指定機種ならびにコンピュータの指定ソフト(3.5インチ2DDまたは2HD)

MS-DOSテキスト、一太郎V3, V5, V6, V8, V9, V10, 新松, 松V5, V6, オーロラエース, IBM DOS文書Ⅲ Ver. 3, Lotus 1-2-3 R2.4J, 2.5J, 5J, 98, Microsoft word Ver. 5, Ver. 6, 98, Microsoft EXCEL Ver. 5, 98, OASYS/Win Ver. 2, RTFJ, カシオワード, ワードパル, ワードプロエース, キャンワード, リポート, サンワード, U1PRO, 文豪ミニ7タイプ1, ミニ7タイプ2, HYPER 7, 文豪DP, ビジネス文豪, LANWORD, ミニ書院, TOSWORD, RUPO, OASYS 500シリーズ(2EDフロッピーは対象外), OASYS。

マッキントッシュ(MS-DOSのテキスト・ファイルの形式であれば可能)。

2. 校正不要の責任原稿を提出する場合の活字とポイントの指定

ワードプロセッサで校正不要の責任原稿をプリントアウトして提出する場合には、下記の字体とポイントの指定(実際のサイズ)にしたがって文章を構成し、できるだけじみのない印字原稿を作成すること。

実際の印字例は次頁の見本組に示したサイズである。上下左右の余白は必ず2.5cm以上とること。

標題：明朝体16ポイント強調

(センタリング)

副題：明朝体11ポイント (センタリング)

氏名：明朝体10.5ポイント (右つめ)

要約：タイトルはゴシック体9.6ポイント

本文は明朝体9.6ポイント

キーワード：タイトルはゴシック体9.6ポイント、

項目は明朝体9.6ポイント

章：2行取りゴシック体11ポイント

節：1行取りゴシック体9.6ポイント

項：1行取り明朝体9.6ポイント

注、引用・参考文献：タイトルはゴシック体11ポイント

本文は明朝体9.6ポイント

5. 見本組み

次頁に23字2段組(段間4字)×40行に設定した見本組みを示している。これには、実際にプリントアウトした場合の、フォント及びポイントの見本が示されている。(文責：柴田)

V 今後の課題

次期公開研究会については、研究主題「豊かに表現する生徒を育てるⅡ」と開催時期が決定し、さらに、各教科、グループからは研究テーマと研究概要が出された。来年度は研究に向けての具体的な実践活動が主に行われることになる。

また、竹早地区「幼・小・中一貫教育」の内容面について継続検討が行われることになろう。

(文責：池田)

5. 見本組み 23字2段(段間4字)×40行 (フォントとポイントの見本)

研究紀要について
— 今後のあり方を考える —

柴田 俊和
研究部

要約

研究紀要のあり方については、これまでも部会内でたびたび議論されてきてはいるが、全体で議論し共通理解を持つところまでにはいたっていない。創立以来、本校は教育の実践的な研究を進めることを使命としてきた。こ
(中 略)

という形で考えるのが妥当である。

〈1行アケル〉

キーワード「教育改善 研究紀要」

〈1行アケル〉

I 現状と問題点 } 2行ドリ

1 現状

(1) 学校運営の方針

本校では、1947年の創立以来^(註1)、教育の実践的な研究^(註2)を使命のひとつと……………

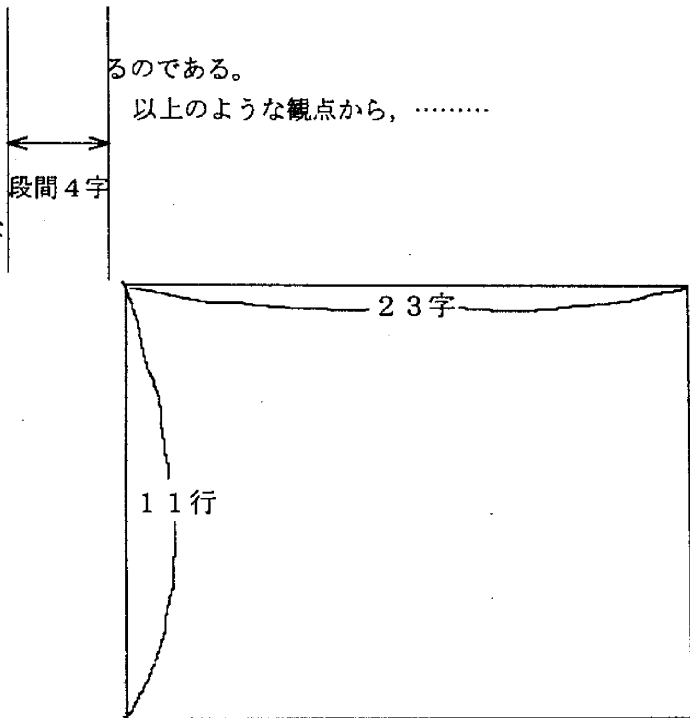


表1 教科別原稿数の年次推移

ということを考えていきたい。

〈1行アケル〉

注1) 当時は、まだ分掌がはっきりしておらず、さまざまな試みが……………

注2) 学習指導要領では、……………

〈1行アケル〉

引用・参考文献

〈1行アケル〉

1) 佐藤 学：教師というアポリア，世織書房：神奈川県，pp. 243-244，1997.

2) エドワード・ホール：日高敏隆他訳，かくれた次元，みすず書房：東京，pp. 216-217，1970.

情報の発信基地¹⁾としての責任もあろうかと思われ